

# 『最果ての道を超えて』

—天高く猫眠る星シリーズ1—

## 第一章 「戦後 100 年」

佛木局長がここ連邦政治局に勤め始めて、早いものでもう 30 年になろうとしている。その 30 年という長い年月の間、世界的に問題と呼べるほどの大きな問題もなく、特に 7 年前、佛木局長が 41 才という異例の若さで信州支局の支局長に就任してからというもの、連邦政治局はこの長久的な平和の中にどっぷりと浸っていた。

戦後、それまでの国連に代わって新たな国際機関として組織された連邦政治局の目的は、地球上にいくつか残っている国家の統合と、戦後次々と開拓された惑星国家との経済流通である。しかし、現在に至っては文化、科学だけが重視され、人々の何でも屋と化してしまっているのは否定できない事実だろう。

今を溯ることちょうど 100 年前、大国同士の関係は歴史上類を見ないほどの最悪な関係となり、まず世界各国で株が暴落し世界恐慌の風が吹き荒れた。やがて人々はドルを見捨て始め、ドルの長い基本通貨としての歴史に幕が降りることとなった。このことは人々を更に恐怖と絶望の底に陥れるには充分だったといえる。とにかくこの時点で誰もが真っ先に考えたのは、いつ戦争が起こるのかだけだっただろう。

その誰もが持っていた疑問に答えるように、まずイギリスがソ連に宣戦布告した。続いてドイツ、アメリカ、フランス、カナダ、イラン等の国々が次々と名乗りを上げ、世界は第三次世界大戦の様相を呈し始めていた。そんな中で参戦か非参戦かで結論を出しかねていた日本も、遂に参戦を宣告した中国の為に動かざる得なくなり、その降り掛かる火の粉は自分の手で降り払うという名目で参戦を決定した。

しかし、日本が参戦を決定した理由にはもう 1 つあった。それは、かねてよりまったくの極秘に開発を進めていた最終兵器が、ようやく実験段階に入ったということである。つまり、日本としてはこの最終兵器の成果を見る機会が欲しかったとも言える。そして、この戦争はその実験にはまさに打ってつけだと思われたのだ。

最終兵器…、それは他の大国が保有していた戦略核に対して、全地球的な規模で核の効力を無効にしまう物だった。複数の人工衛星からの特殊な電磁波で地球をある磁場の中に包み込む。この磁場の内側では核の反応は安定を保ち、如何なる反応も起きないという物であった

結果はまあまあだったと言えるだろう。当時、戦略核に頼っていた国家ほどその保有数分のダメージを受けていた。しかし、1 台の人工衛星が正常に作動しなかった為、全ての核が完全に無効にはならず、残ったいくつかの核は確実にその恐ろしさを人々に教えていた。

核の恐ろしさを改めて目の当たりにした人々は核の影響をもっとも恐れて、その頃既に植民地化されていた月や火星へ我先にと逃げていった。この時地球を脱出した人間は 20 億人とも 30 億人とも言われ、正確な数字は今もって誰にも分からないだろう。とにかく一時は軍人しかいないとさえ言われた地球だったが、実際には地球に残った科学者、文化人も少なくなかったことが今日の地球の

姿を作る力となったと言える。そして、この戦争がまだ早いと思われていた宇宙時代の扉を開けてしまうきっかけとなった。

「局長、バチカン市局より緊急通信が入っています。」

「つなぎたまえ。」

バチカン市局と言えば、南ユーロ圏で現在ただ1つの経済拠点となっている連邦政治局だ。また、宗教色が今もって強く残っている国としても有名である。

「ホトギ、例の怪電波の正体について南ユーロ圏の解答が出たよ。」

「聞かせてくれ。」

例の怪電波というのは、3年前初めて極東圏で受信されて以来、数回に渡り世界各国で確認されたが、減衰が激しくノイズばかりで何だか分からない上に、使用している言語形態がはっきりしないことから内容が不明となっていた物だった。連邦政治局としてはこれを地球民族以外からの初めてのコンタクトとして重視し、バチカン市局にその内容の解読を依頼していた。

「発信源はMR-7星系、おうし座方向の小さな星系だ。内容はたぶん救難信号と思われる。」

「…思われる？」

「科学者達の間で意見が割れているんだ。現状ではこれ以上の断定は出来なかった。」

「で、本部局の判断は？」

「やはり調査には乗り出すつもりだ。早急に地図を広げねばなるまい。至急飛んで欲しいというのがベルギーの意志だ。今回はEC圏がサポートに付く。」

「了解した。」

地図を広げるとなれば誰かが行かねばならないのだが、その任務にはたいていの場合極東圏が当たる。それは、そういう専門の開発部門が通常設置されていないことと、極東圏には宇宙に出るには打ってつけの人物がいることからだった。ただし、日本の様に宇宙港を持たない所がその任務に就く場合、今回の様に宇宙港を持つ国が特別にサポートに就く。

「科学部の指田少佐を呼びたまえ。」

「指田少佐は現在学会に出席の為、パキスタンに行っています。」

「すぐ呼び戻すんだ。」

その打ってつけの人物の名は指田少佐、人々からはコードネームのルクランシェセル・クマの名で呼ばれている。

## 第一章「戦後100年」

H6. 25. APR

## 第二章 「我が名はクマ」

JR小諸駅を降りるのもなんだか随分と久しぶりの様な気がしてしまう。実はつい2週間ほど前にここから大阪に向ったばかりなのだが。やっぱり私はここから離れられない性格なのかもしれない。私は人類の新しい可能性として、現在各国の注目を集めているサイボーグの学会へ出席していた。戦後、新しい居住空間として月や火星、そして木星の衛星等に人間が集まってくると、どうしても宇宙での作業が増えていくことになる。大概の場合はドロイドにやらせればいいのだが、場合によってはそうもいなくなる。ところが人類は元々地上の生物であるが故に宇宙での作業には適さない。そこで注目されたのがサイボーグという訳だった。

私の身体は実を言うと12年前のある事故のせいで、ほとんどの部分が機械と取り替えられていた。つまり、私自身がそのサイボーグという訳だ。そのせいで自分の専門外であるサイボーグ学会なんかに出席する羽目になってしまったのだ。

12年前、私はまだ東京のジュニア・スクールに通っていた。校庭の端にあったそれが何なのか知っていたとも思えなかったが、近づいてはいけないと大人達が言っていたことだけはよく憶えている。ある日、連邦政治局のエアカーが3台校庭に入ってきた。それは科学部の核処理班の人達だったと思う。学校は休みとなり、生徒は全員帰ったはずだった。そう、私1人を除いては…。普通ならこんな核弾頭の1つや2つ、何事もなく処理できたはずだった。しかし、余りにも長すぎた平和が緊急時の対応を誤らせたのだ。爆発自体は大した物でなかったにしても、どちらかという問題は放射能にあった。急遽、東京エリアは閉鎖され、人々は自分の家を失うこととなり、そして私は自分の身体を失った。

政治、経済の中心を失った日本はというと、その中心を信州エリアに移すことにした。大阪へ移すという意見がかなり強かったようだが、連邦政治局の信州移転と同時に自然とここに集まってしまったらしい。

「指田です。局長に帰ってきたと伝えてください。」

受付の女性にIDカードを提示すると、私は相手の返事も待たずにそのまま進んでエレベーターのスイッチを押した。どうせいつもの事だ。また背中で笑いを堪えているのがよく分かる。だいたいベアタイプで歩き回ろうということ事態に無理があるのだから、笑い声が悲鳴でなかった分だけまだましだというものだ。

エレベーターで5階まで上がる。降りてすぐ右へ行くと突き当たりが局長室だ。私は大きく深呼吸を1回すると、ノックを2回、局長の返事など待たずにドアを開けた。

「急に呼び戻してご苦労だったな。挨拶は抜きだ、座りたまえ。」

部屋に入るなりいきなりそう言われ、軽く会釈だけすると黙ってソファに座った。

「早速で済まないが用件に入ろう。君も知っての通り、3年前より数回に渡って確認された例の怪電波だが、ようやく南ユーロ圏より解答が出てきた。」

私は局長の言葉に頷いた。あれは確かこの通信室が最初に受信したものだ。内容がまったく解読できないので、通信班の人間が相当悩んでいた。平和のメッセージだの、宣戦布告だの色々な憶測が飛び交ってはいたが、あれが遂に解読できたのか…。

「あれの正確な発信源はMR-7星系、信号の内容は救難信号らしい…。」

「らしい…というのは、いったいどういう意味でしょうか？」

「そうではないかという憶測の接尾語だ。」

「は…？」

「いや…、失礼。これを調査していたのは南ユース圏の民間機関なのだ。彼等も結局それ以上のことまでは解読できなかったという訳だ。」

し…心臓が止まるかと思った。局長がまさかギャグを言うとは。しかも、よく考えなきゃ冗談だったのか何だったのかわからないような奴で。これで、局長が「やっぱり受けないか…」と小声で言ったのを聞き逃していたら、永久に気付かなかったと思う。まったく、よくこんなつまらないギャグを言う気になったもんだ。

「そ…それで、私は何をすればいいのですか？」

「すぐにでも MR-7 星系に飛んで欲しい。もちろん名目は調査だが、場合によっては本当に救助活動になるかもしれないぞ。誰を連れて行くかは君に任せるが、船はアルトロンしか用意できない。」

「アルトロンと言ったら軽じゃないですか。」

「空いている船が他にないのだ。指田少佐、よろしく頼むぞ。」

「はい…。」

はい…と言ってはみたものの、それこそ冗談じゃない。MR-7 星系と言ったら航路も開設されていない辺境じゃないか。そんな所へ軽で行くなんて普通じゃない。しかし、局長がこう言い切った以上たぶん何を言っても無駄だし、それに私が普通を望むのがそもそも間違っているのかもしれない。

「では、早速ベルギーに行ってくれ。詳しい内容については向こうに行ってから聞くように。他に質問は？」

「ありません。では、失礼します。」

私はちょっと頭を下げて局長室を出ようとした。

「あ、指田少佐！」

「は…？」

ドアを開けた途端再び呼び止められ、私はそのまま振り返った。

「一つ言い忘れていたが、今後どんなに急いでいる場合でも着替える時間を与えるから、そのベア-タイプで歩き回るのはやめた方がいいぞ。」

「はあ…、私もそう思います。」

そう、さっき受付で笑われたのも、全部この格好のせいなんだ。ちょうどベア-タイプの時にコードAの呼び出しを受けたものだから、そのままの格好でとうとうここまで来てしまったんだっけ。いい加減、どこかで着替えなきゃ…。

私の身体は約 60%が機械と取り替えられている。その内の半分くらいは他のサイボーグ達とそう大差はないんだが、つまり残りの半分、全体の約 30%に他のサイボーグにはない特殊機能が付いている。それは、私の身体が 2 種類あるということで、それがこんな恥かしいクマの格好をしているという理由だったりする。

なんでもこのクマの格好、設計者の趣味だったらしいが、その人に言わせれば、宇宙空間で活動するには、クマの体形というのは最高なんだそうだ。つまり、このベア-タイプの中に宇宙空間で必要とされる機能がすべて詰まっているという話だった。今でこそ慣れてしまったが、初めの頃は死んでもベア-タイプなんぞになどなるものかと思っていた。

逆にマンタイプの方は、普通の成人男子並みの力が出せて、一応私の元々の顔をモデルにして作ってある。マンタイプである限り、私がサイボーグであることがばれる心配はないと言える。ロッカールームでマンタイプに戻ると、私は久々に科学部の部屋に行ってみることにした。ドアを開けると相変らずの熱気の中、皆忙しそうに動いていて、久し振りに帰った私に誰も気付く様子がない。ま、別にいつものことだから気にしないけどね。

「あ、お帰りなさい。」

やっと1人だけ気付いて通りすがりに挨拶していくが、やっぱりすぐに行ってしまう。科学部に所属しているとはいえ、最近は学会に行っているか開発部の仕事で出かけているかでほとんどここにはいないので、どうも違和感を感じてしまう。

「パキスタンに行ってたんじゃないんですか？」

「途中で呼び戻されてね。今頃、むこうじゃ三好君1人で頑張っているよ。」

「彼1人で大丈夫なんですか？」

「今回の下準備は全部三好君1人でやってたんだし、それに彼にとってもいい経験になるんじゃないかな。」

何人かの人間と適当に会話しながら、視線だけ自分のデスクに走らせる。相変らず処理されない書類の山がそこにあった。そのままグルッと部屋を見渡してみる。

アルトロンは4人乗りの小さい船だ。確かに小回りは効くし、便利と言えば便利なんだろうが、今回は長距離を行かなきゃならないことを考えると、一緒に連れて行く人間で大きく結果が変わってくるということになる。いったい誰を連れて行こうか…。

「はい、ノリじゃない。こんな所でポケーツと突っ立ってて何してんの。パキスタンに行ってたんじゃないじゃなかったっけ？」

いきなり後ろから叩かれて、驚いた拍子に私は身体のバランスを崩しかけた。

「シモさあん…。」

「こんな邪魔っ気な所にヌポーツと突っ立ってる方が悪いんだ。」

「そりゃあすいませんね。あつ、ところでちょうど良かった。シモさん、2週間ぐらい暇を作れませんか？」

「2週間かあ…。どこに行くのかにもよるけど。」

「開発の方の仕事で外宇宙まで。」

「外宇宙か…。行きたいのはやまやまなんだけど、来週エリちゃんをどこかへ連れてく約束してるからなあ。近場なら連れて行けるけど、外宇宙じゃねえ…。」

「分かりました。じゃあ、他の人に当たってみます。」

「あ、それなら行きたがっていたのが1人いたじゃない。」

「誰ですか？」

「文化部の Mya。訊いてみようか？」

「いえ、自分で行きます。どうせ文化部にも顔を出さなきゃなりませんから。」

「そう、じゃ、またそのうちに。」

確かにあの子が宇宙に出たがっていたのは事実だけど、どうしたものかなあ…。今回の仕事は既に開通している空間をのんびり行くのと違って、何が起きるかまったく分からない。としたら、経験のない者を連れて行くより経験者を連れて行った方がいいに決まっている。それに、あの子が行く

となれば絶対に他の2人もついて来るに決まっている。つまりはどう考えても、今回の仕事に適切なパートナーになるとは思えない。

これは黙っていた方が無難だろうな。何もここで無理やり捜さなくても、ベルギーの方にはいい人材がたくさんいるはずだし。

という訳で、これ以上ここにいてもあまり意味がないので早速駅へ向かうことにした。いつまでもここにいると、どこからあのお嬢さん方に嗅ぎつけられるか分かったものじゃない。

駅まで来てちょっと考えた末に、帰ってくる時に使ったJRはやめてエアカーでハイウェイに行くことにした。朝夕のラッシュ時ならいざ知らず、こんな中途半端な時間帯だとエアカーの方がかなり早い。それにエアカーの方が消息を断ちやすいという面もある。

駅でエアカーを1台借りると、行き先に大阪国際空港をインプットした。あとは寝ている間に黙っていても目的地に着く。エアカーは静かに浮上すると、ゆっくりと前進し始める。

私がエアカーを選んだ理由には実はもう一つあった。それは、今回はまだゆっくりと浅間山を見ていなかったことを思い出したからだった。

窓の外に目を向けると、すっかり都会の顔になってしまった小諸の街と、その後ろに相変わらず大きくそびえる浅間山が流れていた。

## 第二章「我が名はクマ」

H6. 25. APR

## 第三章 「3人の候補生」

2年振りにEC圏に降り立った。あれは文化部の仕事で、たしかアカデミーに出席する為に来た時以来だと思ふ。そういえば、あの時知り合ったメンバーは今頃どうしているんだろう。後で顔だけでもこの文化部に出すか。

戦後、比較的ダメージの少なかった国から順々に復興していった訳だが、EC圏の中で一番早く経済復興を成し遂げたのがベルギーで、その為国連に代わる新たな平和組織を作る時、本部局をここに置く事を決めたのだった。今となってはベルギーという地名は連邦政治局の本部を指す代名詞にさえなってしまうている。

また各支局で解決できない問題はすべてここへ持ち込まれる為、ベルギーの存在はそのまま連邦政治局の存在を示していた。局員の約5分の4という人間が少なくとも1回はここへ来たことがあるというのも、なんとなく頷ける話である。

さて、空港まで誰か迎えに来てくれると言っていたんだが…。私は空港のコンコースをぐるっと見渡した。普段なら大抵相手の方が先に私に気付いてくれるんで、こうして私が相手を捜すというのは大変珍しい。だいたい、連邦政治局の制服というのは赤のブレザーだから、よっぽど人込みの多い場所でない限りすぐ分かるはずなのだ。

「くま先輩！」

「うわっ！」

いきなり背中を突っ突かれ、慌てて振り返った。

「お久しぶりです。」

「こんな所で会うなんて奇遇ですね。」

悪戯っぽい表情で笑っている女の子が2人。2人ともよく知った顔だった。おとなしめで軽く会釈している方が柴野さん。ストレートの髪を肩上まで伸ばして、口に手を当てたポーズをしているのが明子ちゃん。たぶん、人の背中を突っ突いたのはこの子の方だろう。

「これはこれは、誰かと思えば、いったいこんな所で何をしているんですか？」

「Myaを待っているんです。」

「あたし達、先週からアカデミーの為にこっちに来ているんですけど、初めてだからよく分からなくて。」

「くま先輩は？」

「開発部の仕事でちょっとね。」

私はもう一度周囲を見回して、迎えが来ていないかを確認した。

「本部へ戻るんでしたら一緒に行きますが、どうしますか？」

どうも私の相手は来ていないようだし、このまま行ってしまっても問題はないだろう。

「でもMyaが帰ってこないし…。」

「どこへ行ったんです？」

「さあ、いつのまにかはぐれていたから。」

「じゃあ、ここで待っていてもしょうがないじゃないですか。意外と先に戻っているんじゃないですか？」

「そうですね。それじゃあ、本部まで一緒に行って貰えますか。」

そう言いながらも、2人はまだ周りを捜している。あの子のことだから、どうせそこいらへんを1人で歩き回っているに決まっている。黙っていてもちゃんと帰ってはくるから、まあ今回も放っておいて大丈夫だろう。

「エアカーを借りてきますので、ちょっとここで待っていて下さいね。」

「はい。」

こうやって見ている分には、柴野さんの方が落ち着いているし、言葉も必要な事以外ほとんど喋らない。2人を比べた場合、どう判断したところで、行動に落ち着きがない明子ちゃんの方が実戦には向かない気がするのだが、このまえ文化部で見せて貰った資料では、明子ちゃんの方が僅かながら実戦での適性が上だった。それがどういう意味を持つのか、実に興味深かったりする。

ちなみにいまここにいない *Mya* はというと、これが見事にひどい成績で、よく連邦政治局に入局できたという感じだった。しかし、それが逆に何か大きな理由がありそうで怖い。…実はそう思わずにはつきあい切れなくなるというもある。

そういえば最近よく聞く話したが、この3人が揃って何かをするとやたら事がでかくなるらしい。以前、この3人である人工衛星の生活環境を調査に行き、危うくその衛星を壊すところだったとか。ところが、これをぎりぎりのところで救ったのもやはりこの3人だということだから分からない。局内での噂では、この3人が揃うと不可能を可能にしてしまうという話だ。しかも、それが1回や2回ではないらしい。私はこの3人と一緒に仕事をしたことがないので本当だかどうか信じ難いんだけど。

しかし、いったいどうやったら人工衛星を壊せるんだろうか不思議だ。

「アカデミーの方はどんな状況ですか？あそこは色々な国から人が集まるから面白いでしょう。」

「はい、今回は特に火星圏と木星圏からの参加があったのでとても勉強になりました。」

「それで聞いて下さい。なんと今回のアカデミーのレポートをあたし達が書くんです。」

「それは凄い。これは書き上がったらずい読ませて下さい。」

柴野さんがちょっと微笑んで頷く。

アカデミーでレポートを任されるというのは並大抵のことではない。事実ここでレポートを書いたことのある者は現在その殆どが局長か部長クラスになっている。まして複数の者に担当させることなどはアカデミー史上初めての筈だ。

私なんか幸運にも4回もアカデミーに出席しているが、1回たりともそんな話しは出なかった。進んでやりたいという訳ではないけど、1回ぐらいそういうチャンスに巡り合いたいと常々思っている。なんとなく自分が出席したアカデミーのことを2人に話ししている内に、連邦政治局の中核とも言えるベルギー本部の前に到着していた。さほど大きくもない建物ではあるが、この圧倒されるような感覚は何回来ても直らない。たまに来る私でこうなんだから、毎日ここへ来ている人はいったいどういう神経をしているのか謎である。

「それでは、またそのうち機会があれば。」

「先輩はいつまでこっちにいるんですか？」

「それは私にも分からないんです。ひょっとすると明日にはもういないかもしれないし、ずーっとここで足止めにされているかもしれない。とにかくこれから任務の詳細を聞くものでね。」

「へえ、大変なんですね。じゃあ、また日本に戻ってきた時にでも続きを聞かせて下さい。」

「では失礼します。」

2人は軽く会釈をして、隣の建物に入っていった。ここ周辺に立ち並んでいる建物は殆ど連邦政治局の建物だ。そのため部署によって入る建物が決まってしまう。私は開発部付きの身分なので、文化部の2人とはここで別れることになる。

私は2人の姿が完全に見えなくなるまで見届けると、政治部の建物に入った。開発部というのはどういう訳だか、世界各国どこへ行っても別の部に間借りしている不思議な部である。別に予算がないという訳でもないのだろうに不思議だ。

受付の女性にIDカードを提示し、そのまま奥にある開発部に行こうとした途端…。

「指田少佐ですね。連邦委員長がお呼びです。開発部ではなく、議会本部の方へいらして下さい。」

「あ…、ありがとう。」

私はこの女性の指し示す方向に頷くと、行きかけてちょっと考える。

連邦委員長…？連邦委員長と言ったら各政治圏の代表で構成される永世議会の最高顧問で、私みたいな位置にいる人間なんかほいほいと会えるような人物じゃない。いったいなんでそういう人が私を呼んでいるんだ…？

確か議会本部といったら、まだ日本人で中に入ったことがあるという人はいないと聞いている。これはひょっとするとひょっとするかもしれない。

政治部の建物をどんどん奥へ入っていくと、ちょっと開けた場所に出て、そこにはもう1つ小さな建物があった。雰囲気としては建物の中に小さい建物がすっぽりと入ってしまったかのようだ。その小さい建物が議会本部の建物らしい。

…と、中に入ってみたものの、見事に何もなし。受付がないということ自体おかしいのだが、まあどうせ向こうが呼んでいるんだから気にする必要はないだろう。

「ピッ、指田少佐を確認しました。」

途中、電子音が頭上で響く。なるほど、こういう訳か…。

あとは迷うことなく真っ直ぐ進んだ。そして正面にドアが1つ、たぶんここが委員長室。ここでも勝手にチェックされてドアが自然に開いた。

「ようこそ、指田少佐。まあ、とりあえず座ってくれ。」

お…驚いた。連邦委員長なんて雲の上の人物だからどんな人物なのかと思えば、まだかなり若いじゃないか。下手をすると私とたいして変わらないかもしれない。しかも、顔立ちからすると日本人に見える。

「いきなり本題に入って申し訳ないのだが。」

「いえ、どうぞ。」

「実は君をわざわざ呼びつけたのは、個人的に頼みがあるからなんだ。」

「何でしょうか？」

私は勧められるがままにソファに腰を下ろした。

「君の今回の任務については、我々、永世議会の人間もかなり期待している。あの怪電波の内容によっては、我々は新しい存在を認めることになるだろうからね。そこで今回に限り、私が直接君の指揮をとることになった。もちろん、君が反対でなければなんだが。」

連邦委員長という肩書の裏から垣間顔を出しては消える少年の顔。どこかでこの人に会ったことがあるような気がするんだが思い出せない。

「とくに反対はありませんが…。」

「ん…、何かあるのか？」

「いくつか質問してもよろしいですか？」

「何だ？」

委員長は面白そうな顔をして、私の次の言葉を待っている。まるでこの私の質問が当然であり、私が何を質問するのも知っているかのようにも見える。

「今回の任務が重要だということはよく分かりましたが、わざわざ委員長が指揮をとるからにはそれなりの理由があつての事だと思います。もし差し支えなければ聞かせて頂きたいと思ひまして。」

「そうだなあ、君はどういう理由だと思う？」

「分からないから質問したつもりなのですが、もし強いて挙げるとすれば、政治局長との不仲は誰でも知っている事実だと思います。」

「そうだ、それもある。今回のこの任務だけはあいつに邪魔されたくはない。その為には君の全面的な支持と信頼がなくてはならないんだ。」

これは噂なのだが、政治局長を含めた長老とよばれる人達が、事あるごとに連邦委員長を疎外しているという話を聞いたことがあった。しかし、もしそれが事実であるとすれば、現在の連邦政治局の組織内容からして分裂しかねない筈だ。それとも、事実は私なんかの位置の人間では予想もし得ないほど複雑になっているのか。どっちにしても私には納得できるだけの答えをみつけることは期待できそうにない。

「それも…ということは、他にもまだ理由があるんですか？」

「ある。しかし、それはまだ言えない。一応トップシークレット扱いなんでね。それに、じきに君にも分かってしまうと思うよ。」

「はあ…。」

今までの噂を信じる限り、この委員長についての悪い噂というのは一度も聞いたことがない。信頼すべきかどうかは別にしても、少なくとも嘘はついていないように感じた。

「で、私は具体的にはどうすればいいのですか？」

「そうだなあ、まず君のパートナーを決めてやらねばな。どうだろう、もしよければ私に選ばせては貰えないかな。」

そういえば忘れていた。ベルギーに来れば誰かいるだろうとただ漠然と考えていたくらいで、別に当てがある訳じゃないんだ。もし委員長がいい人材を推薦してくれるのであれば、私に反対する理由などこれっぽっちもない。

「それはもう願ってもないことです。どうしようか考えていたんです。」

「それはよかった。断られたらどうしようかと思っていたんだよ。実はもうその本人がここに来ていてね。いま別の部屋で資料を読ませているんだが、たぶんじきにこっちに来ると思う。」

委員長がニヤッと笑った瞬間、背筋に嫌な悪寒が走る。な、なんなんだ…？

その時カタカタという小さな振動音が聞えてきて、私は反射的に振り返った。

「ピッ、お茶が入りました。」

キャタピラ走行式のロボットが、ティーセットを両手に持ってやって来たところだった。その姿がなんとも可愛らしく、おもわず頬の筋肉が緩んでしまう。

「ああ、紹介しておこう。彼はウィンダムだ。製造年代は結構古いが、なかなか良くやってくれるよ。」

ウィンダムはちょっと首を傾げて愛敬を見せると、私と委員長の前に赤いティーカップを置いていく。

「ピッ、指田少佐、よろしくお願いします。」

「いや、こちらこそ。」

そうか、さっきのチェックはこのウィンダムがやっていたのか。

「ピッ、委員長、桂局員がこちらに来たようですが、通してよろしいですか？」

ウィンダムの額に付いているインジケーターが忙しく動いている。

「通してくれ。あと、残りの2人にもこっちに来よう伝えておいてくれ。」

「ピッ、了解しました。」

「資料を読み終わったようだな。」

また、さっきと同じ嫌な笑い方…。嫌な予感がする。

「私のパートナーは3人もいるんですか？」

「まあね、会えばその理由もすぐに分かるようになるさ。」

「たぶん…。」

桂局員という名前に加えて、あと2人もいるという事実。私はさっき、明子ちゃんと柴野さんの2人と別れたばかりだ。ここから、ある最悪な結果を予想することは、さほど難しいことだとはたぶん私以外の人間でも思わないだろう。しかも、ある意味において、私はこの事実から回避する方法を知らない訳だ。

そんなことを考えている間に、実に聞き覚えのある声が、ドアの開く音と同時に飛び込んでくる。

「桂中尉、入ります。」

やっぱり…。

「桂中尉、あと湯浅中尉と柴野中尉、以上3名を連れてMR-7星系に行ってくれ。」

そう言った後、委員長は顔を近づけて、そっと彼女に聞こえないように付け加えた。

「本当は彼女に弱味を握られていてね、断わり切れなかったんだ。大変だとは思いますがよろしく頼むよ。」

「はあ…。」

なんか、腹が立つのを乗り越えて、脱力感が身体を包み込む。

「でも、どういう理由で文化部の人間が開発部の任務を手伝うんですか？しかも、彼女達には航行の経験はないんですよ。」

「そこはそれ、連邦委員長としての私の権限でなんとでもなる。とりあえず3人には開発部の候補生ということで船に乗って貰う。ちなみに階級は3人とも中尉だ。」

「中尉…？」

普通、候補生程度なら、少尉の位で充分だろうに…？

「ピッ、湯浅中尉、柴野中尉、以上2名来ました。ここに通します。」

ウィンダムの報告と同時に2人が入ってくる。

「Mya、こんな所で何やってんのよお。捜していたんだからねえ。」

「へっへっへっ。」

「まったく…。」

ただでさえ危険な宙域に、ドの付く素人を3人も連れて行かなきゃならないとは…。

「で、どういう訳だか、このお嬢さん方はそれぞれ資格を持っていてね。少尉では他の者との釣り合いが取れなくなるんだ。」

委員長は少し肩をすくめて、やれやれといった表情を作る。

「あたしが2級宇宙情報士と3級航海士。」

と、これは *Mya*。

「あたしは1級通信士。」

と、これが柴野さん。

「あたしは2級航海士と2級物理工学士なんです。」

と、最後に明子ちゃん。

3人ともわざわざ資格証明書を出して見せてくれる。

「何か気に入らないことでもあるんですか？せっかく一緒に行けるというのに。」

「いえ、別にそういうつもりではないんですけど。ただ、あなた方がそんな資格を持っていたなんて知らなかったもので。それで、文化部の方はどうする気ですか？」

「室長の許可はとっくに取ってます。」

「そちらの2人は？」

「レポートは帰ってきてからでも構わないと、アカデミー長の方からさっき言われましたので。」

明子ちゃんはそう言って、チラッと委員長の方を見る。

「さすが和岐さん。」

「桂中尉、ここでは一応、委員長と呼びたまえ。」

「一応でいいんですか？」

「そうか、湯浅中尉は行きたくないのか。」

「わーん、委員長！」

…あ、頭が痛い。しかし、これからのことを考えると…。

「まあ、という訳だな。何かと大変だとは思いますがよろしく頼む。指田少佐、桂中尉、湯浅中尉、柴野中尉、以上4名の者、MR-7星系までの航路調査を命ずる。」

突然、連邦委員長の顔が真面目な表情に変わり、正式な辞令が発せられた。この瞬間、嫌が応でもやらざる得なくなってしまう。ま、なんとかなるでしょ。

この3人を連れて行くことで、事が大きくなるのか、上手く行くのか、どっちにしても退屈はしなくて済みそうだ。

### 第三章「3人の候補生」

H6. 25. APR

## 第四章 「ステーションV F」

人々が行き交う雑踏の中、私はひたすらに3人の女性を待っていた。ここは冥王星軌道上を周回するステーションV Fの中央コンコースだった。

太陽系から外宇宙へ出る場合、色々なチェックを受けることになる。それは健康状態から、宇宙船の型式、資格、旅行の目的など多岐に渡っている。そのせいで丸1日ここで足止めされるなんてことはよくあることで、事実この私もこの特殊な身体のおかげで、3日間止められたことがある。

元々は冥王星軌道上に1ヶ所あるだけだったステーションも、現在は増えて6ヶ所もある。旅行しようという人々は自分の行き先に応じて、それぞれのステーションを選ぶという訳だ。今回の任務の場合、途中までは既に開設されているMR-4星系行きの航路を使う。そして、その先が本来の任務ということになる。

「くま先輩、お早ようございます。」

「お早ようございます。」

明子ちゃんと柴野さん、遅れてきたというのに悪びれた様子もなく、元気が余っているという感じだ。怒ろうと思っていた気持ちが、2人の格好を見た途端にどこかへすっ飛んでしまう。

「あのですねえ…。」

しかし、いくら宇宙に出るのが初めてだというにしても、このお嬢さん方は本気でワンピースで行くつもりなんだろうか？

「あなた方はどこへ行くつもりなんですか？」

「えっ、MR-7星系じゃなかったんですか？」

「いえ、そういう意味じゃなくて…。」

私は自分の服を摘んでみせた。

「分かっていますって、くま先輩をからかおうと思っただけです。あとでちゃんと着替えますから。」

「なら、いいですけど。」

なんとなく柴野さんの笑顔を見るとホッとする。このお嬢さんは目立たない性格のおかげで、明子ちゃんの影に隠れてしまっているが、その行動はまともなので普段が一番信頼できる。べつに他の2人が信用できないという訳ではないが、いつもふざけているのか真面目なのか分からない部分があるのが私を困らす原因でもある。

「でも、くま先輩も着替えて下さいね。」

「どうしてですか？」

「だって、外宇宙に出るのにその格好で行くんですか？やっぱり、くま先輩はクマじゃないとつまんないじゃないですか。」

これだ…。明子ちゃんだけなんだ、私の身体で遊びたがるのは。間違っても、このお嬢さんの前でだけはベア-タイプになっちゃいけない。

「遊ばれると分かっている、ベア-タイプにはなりませんよ。今回の任務ではずーっとこの格好です。」

「あーん、そんなのつまんないよお。」

「ところで、なんでこんなに遅れたんですか？今日あたりじゃ定期便も空いていたでしょう。」

とりあえずうるさい明子ちゃんを放っておいて、柴野さんに訊いてみる。

「実はですね、本当なら10時の定期便に乗って間に合うはずだったんです。それが、Myaがなかなか来なくて…。」

「それで遅れた訳ですね。で、その桂中尉はどこなんですか？」

「なんか気分が悪いって、きっとトイレに行ったんじゃないかしら。待っていれば、すぐ来ると思っています。」

柴野さんに聞いていたのに、いつの間にか明子ちゃんが答えている。べつにどっちが答えてもいいんですが、それにしても明子ちゃんの言葉は、私の心を不安にさせる。なんか、急に嫌な予感がしてきた。

今さら言っても仕方のないことなんだが、私は初めからこの3人と待ち合わせるのを避けたかったんだ。それをあの委員長が…。

ベルギーのスペースポートを出る時、私は当然3人ともアルトロンに乗り込むんだと思っていたら、Myaが先に行ってくれと言う。一応、反対はしたんだが、あの委員長が余計な口を出すもんだから結局1人で先に来ることになってしまったんだ。どうせ、手続きで待たされるのならと思っただけ、まさかこれ以上待たせる気じゃないだろうな。

「とにかく、私は桂中尉を捜してきますから、先に健康チェックを済ませておくように。終わったら必ずここに戻って来て下さいよ。」

「はい。」

まったく、いつも返事だけはいいいんだけど、いつまでたっても学生気分が抜けないんだから、まったく困ったものだ。とにかくMyaを捜しに行かなくては。

2人を置いて中央コンコースをキョロキョロしていると、女性の声でアナウンスが流れてきた。

「ピンポンパンポン。連邦政治局の指田少佐、連邦政治局の指田少佐、いらっしゃいましたら、コンコース2階のファーストエイドまでおいで下さい。お連れの方がここでお待ちです。」

ファーストエイド…？いったい何をやらかしたんだ。

あのお嬢さんの放浪癖に慣れない訳ではないが、やってもいい時とやってはまずい時の区別ぐらいはつけて欲しい。これで宇宙になんか出て大丈夫なんだろうか？真剣に考えてしまう。

まずは絶対にこっちの予想した行動は取らないと思って間違いはない。的確な表現をするなら、さしずめ生きているびっくり箱といったところだ。まあ、それが一番彼女らしい行動なんだから仕方がないと言えば仕方がないんだが、つきあわされるこっちの身にもなって欲しい。

ステーションのファーストエイドにいきなり飛び込んでしまった私に、看護婦の制止する声が響く。

「静かに！ここをどこだと思っているんですか。」

「あ、すいません。」

これはどう考えても自分が悪いんだから仕方がない、素直に謝るしかないか。しかし、こんな時つくづくベアタイプでなくて良かったと思う。

「実はさっき放送で呼ばれた指田ですが…。ここに私の連れが厄介になっていると聞いたもので。」

「ああ、あの子の…。しかし、ここには病人もいるんですからね。もっと注意して頂かなくては困ります。」

「申し訳ありません。」

ここでようやく看護婦さんの顔から警戒の雰囲気が消えて、優しい笑みが浮かんだ。

「で、どこにいますか？」

「あ、そ、こ…。」

看護婦さんの意味あり気な言い方と、何故か外を指差す人差し指。視線をてんてんと追っていくと…、いた！ファーストエイド前にあるファーストフードでジュースなんか飲んでいる。

「あの子、具合が悪いんじゃないんですか？」

この質問を口に出した瞬間、ふわっと嫌な感じが心をよぎる。まさか…。

「あの子ね、ここに来た時は本当に今にも死にそうって声を出していたのよ。それが、あなたを呼び出す放送がかかった途端、ケロツとした顔で言うのよ、お世話になりましたって。周りにいた者全員がみんな呆気にとられたわ。」

「どうもすみません。じゃあ、あの子はなんともないんですね。」

「まあ、強いて言えば思春期の女の子にはよくある行動ってところかな。」

「よくあることねえ…。」

よくあると言えば、あの子に限っては当たっていると思う。しかし、この先これを繰り返されては任務に支障をきたしかねないな。

「その顔からするとまだ分かってないでしょ。」

「何がです？」

「あの子は恋しているのよ。女の子はね、あの手この手で男の気を引こうとするの、それは一般の常識では測れない物なのよ。」

「ちょっと、待って下さい。それじゃ、あの子は私の気を引こうとしてこんな莫迦なことをしたと言うんですか？」

あ、頭が混乱してきた。いったいなんでこんなことにならなきゃいけないんだ。私がいったい何をしたというんだ。私は身体の半分以上が機械なんだ。あの子だってそれは知っているはずだ。そんな私にどうしろというんだ。

思わず何の関係もないこの看護婦さんを睨み付けてしまう。

「でも、その顔からすると少しは自覚があるんだ。ああいう子は放っておいちゃ駄目よ。」

確かに…、でも、それとこれとは話しが違う。

「あなた、まあまあなんだから、頑張りなさいよ。」

「え…。」

看護婦さんは私の背中をポンと叩くと、笑いながら行ってしまった。

まったく、何を頑張れというんだ。

とりあえず大きな深呼吸をしてみる。少しでも動揺を取り除かねば、Myaに気が付かれでもしたら、何を言われるか分かったものじゃない。

「桂中尉、具合が良くなったのであれば、そろそろ搭乗したいのですが大丈夫ですか？」

「みゃあ！」

あ、あのなあ…。

「向こうで2人が待っています。遊んでないで早く支度して下さい。」

「みゃあ！」

無視しよう。いつもここで乗ってしまうからこの子が調子に乗るんだ。いつもいつも振り回されているばかりでたまるか。

私は黙って桂中尉を引きずった。

「痛い！痛いってば。」

「では、ご自分の足で歩きますか？」

「歩きますよ。まったく、冗談も通じないんだから…。」

私が乗ってこないと分かって機嫌を悪くしたのか、急にムツとした表情になって足早に行ってしまう。ま、私としてはこの方が扱いやすくいいのだが…。どうせ、根は単純だから、アルトロンでちょっとおだててやればすぐに機嫌を直すだろう。とにかく、早いところチェックを済ませて宇宙に出ないことには話しにならない。

明子ちゃんと柴野さんは、私の言った通りに健康チェックを済ませていた。少し待ちくたびれたとみえて、恨めしそうな目で私のことを見る。

「*Mya*、遅い！」

「ごめん、ごめん。」

「で、どうだったの？」

まったく、仕事でここに来ているということを実感しているんだか…。

「とにかく、健康チェックを早いところ受けてきて下さい。この2人はもう済んでいるんですから。あと、残っているのは桂中尉だけです。」

「はあい。」

「返事は長く伸ばさない。」

「はい、はい。」

「1回で結構です。」

「はい！」

最後に私の耳元で思っきり叫ぶと、やっと動き出す。やれやれ…。

「あれ…。」

「どうかしましたか？」

「IDカードが…、ちょっと待って、たぶんここに入れたんだけど。」

そう言って、バックの中やポケットを探り始めた。私は多少うんざりしながら、それでもその様子をじっと待つことにした。

連邦政治局のIDカードは、たいがいの所で提示すればフリーパスとなるだけの効力を持っている。ここステーションVFにおいても、健康チェックを除いてそれは例外ではなかった。それだけに紛失したとなるとかなり大事になる。

再発行には時間が掛かるし、そうなるとここは一般扱いで通ることになる訳か…。どっちにしてもここでこれ以上足止めを喰う訳にもいかない。それでは完全に予定が狂ってしまう。

「桂中尉…。」

「ごめんなさい…。」

殊勝にも素直に謝ってみせる。しかし、どこまで信じていいかは分からないという気もする。とりあえず何か策を考えないことには…。

ここで *Mya* だけ置いていくという手もあるが、そうすると残りの2人がうるさいだろうし…。ま、当然本人が一番うるさいだろうな。第一、3人揃えばまだ意味はあっても、2人だけ連れていったところで荷物になるのは目に見えている。

「桂中尉はもう一度自分の荷物を確認すること。私は本部局に連絡してきます。」  
だとすれば、1つだけここで時間を無駄にせず、しかも3人とも連れて行く方法がある。やってみなくてはどうなるか分からないが、まあ前例もあることだしなんとかなるでしょ。それにこれで1日か2日遅れるくらいなら、まだあとでなんとかできる。

よし！

俺は決心すると、IDカードを探している3人をゲートの前に置いて、ステーション内にある筈の連邦政治局分局を捜す。今回は余り目立ちたくなかったのでさっきまで顔を出したくなかったんだが、これも緊急事態となっては仕方がない。

「極東圏の指田です。連邦委員長へコードAでつないでください。」

分局に入るなりIDカードを提示してそう告げる。コードAを指定した場合、それは緊急を意味する。こうしないと即時通話ができないのだ。

で、そんな気はしていたが、やっぱり相手は私のよく知った顔だった。

「よお、相変わらず忙しそうだな。今度はどこへ行くんだい？」

「MR-7星系ですよ。地球へはすぐつながりますか？」

「ああ、ちょっと待ってな。本部局ならすぐつながる。」

その昔、私がまだ普通の地上勤務をしていた頃に何回か一緒に仕事を組んだことがある男だった。本人に悪気はないのだが口が悪く、他の人からは嫌われていた奴だ。彼がステーション勤務になってからは一緒に仕事を組んだことはなかったが、こうして私が宇宙に出るようになってからはこうやってたまに顔を会わしていた。

実を言えば、こいつと顔を会わしたくなかったばかりにここへは余り来たくなかったんだけど…。

「ほい、委員長が出たぜ。」

「あ、どうも。」

TV電話の前に座ると、連邦委員長の眠そうな顔がモニターに映った。

「指田少佐、わざわざこんな時間にコードAを使ってどうしたんだ？」

そう言えばベルギーはいま夜中か…。とは言っても、元はと言えば委員長がああ3人を押しつけたりしたせいでこんなことになったんだ。

「緊急事態発生です。桂中尉がIDカードを紛失しまして、ステーションゲートを通過できないのです。」

「そんなことなら所属局に照会して貰えば済む問題だろう。」

「それでは時間がかかり過ぎます。予定が大幅に狂うことになりましたが。」

「では、私にどうしろと言うんだ。」

明らかに寝ていたところを起こされて機嫌が悪い。それに、まだ完全に起き切っていないという感じも受ける。

「IDカードの即時発行をして下さい。もちろん仮発行で構いませんから。」

「それは私の管轄ではない。」

「では、あの子3人は置いて行くことになりましたがそれでよろしいですね。」

「ちょっと待て！…分かったよ、IDカードは発行しよう。ただし、この任務の間だけだ。帰ってきた時に改めて紛失届を出してくれ。」

「ありがとうございます。」

渋々といった感じは拭い切れないが、この際そんなことを言っている場合ではない。しかし、あの3人を置いていくと言った時の委員長の顔、よっぽど他人に知られたくない秘密を握られているんだろうな。可哀相に…。

連邦委員長から正式な発行手続きをFAXで送って貰うと、それをそのままステーションの人間に渡す。これでステーション発行の仮IDカードがその場で貰えることになる。

「では、健闘を祈っているよ。」

委員長はニヤッと笑って、右手を中途半端に上げて見せる。そして、そのまま映像が消える。

「ほれ、IDカードだ。気を付けて行けよ。」

「ありがとう。」

「それにしても羨ましい話しさ。俺も一度でいいから委員長にあんな風に言ってみたいもんだ。」

「ちょっとしたコツがあるんですよ。じゃ、行きますから。」

「ああ、元気だな。また、会おうぜ。」

ステーションの分局を出ると、真っ直ぐゲートに向かう。これ以上の足踏みはもう御免だ。ゲートの前で3人が楽しそうにはしゃいでいるのが見えるが、ああいうのにももういちいちつきあってはられない。

「では、行きます。」

「IDカードは…？」

「今度は失くさないように。」

Myaにたった今できたばかりの仮IDカードを渡した。ゲートの検査官も大きく頷く。これで、ようやく宇宙に出ることができる。

「湯浅、柴野、両中尉は先に行って発進準備をして下さい。桂中尉は健康チェックを受けてくること。」

「くま先輩は？」

「桂中尉の見張りです。それから、今後私のことを呼ぶ時は、少佐もしくは船長と呼ぶように。いいですね。」

いい加減、この3人に振り回されたくないかない。誰が何と言おうと私はハードにいきたい。いや、いくんだ。絶対にいく。

「しょうがないなあ、また我が侷なんだから。ま、分かりました。くま少佐。」

…いけるかなあ。

#### 第四章「ステーションVF」

H6. 25. APR

## 第五章 「100%のトラブル」

通信機器チェックOK。推進機器チェックOK。燃料、飲料水、酸素の供給率 100%。乗組員…これは一応OK。しかし、もしこれで駄目だったら、私の目がよほど節穴なのか、それともよほど運が悪いかのどちらかだろう。私としては後者であることを確信しているが…。

なんだかんだと時間はかかってしまったが、どうやらやっと全員アルトロンに乗り込むことができた。私とお嬢さん方3人は船内の点検もすべて済ませ、あとは管制室からの発進合図を待つだけとなっていた。普段ならカチカチという機械の音だけが響いてくるコンソールも、今日に限ってはまるで静寂というものを置き忘れてきたかの様にキャアキャアと騒がしい。

その昔、人類が初めて宇宙空間に出た時に比べ、月や火星、木星にまで居住区のある現在の生活では、一家に1台は宇宙船を持っているのが当たり前になっている。当然宇宙船の方もどんどん新型が出てくるから、中には目的地さえ教えてやれば勝手に連れて行ってくれるオートマチックタイプまである。だから、実際はこんなに神経を使う必要はないし、スポーツ感覚でドライブ気分を楽しんでもよかった。しかし、だからとって危険が0%ということではない。

「管制室より発進許可が出ました。」

明子ちゃんの声で他の2人が静かになった。もともと、今まで一番うるさかったのは明子ちゃんだったのだが…。

「では、発進します。」

柴野さんの声を合図に細かい振動が次第に大きくなっていく。ガツンという衝撃とともに襲ってくる加速感。素早く計器に目を移した瞬間にきた浮遊感。正面のモニター画像を船の後方に切り替えるとステーションがだんだん小さくなっていくのが見えた。

「湯浅中尉、現在の位置とMR-7星系の位置をもう一度確認しておいて下さい。」

何故かどうしてもやりたいという本人たつての申し出により、明子ちゃんにレーダーと通信をやって貰っている。

「柴野中尉は、このデータをアルトロンに指示してやって下さい。」

そして、明子ちゃんに仕事を取られた形の柴野さんがアルトロンのコンソールについている。その柴野さんに連邦委員長から貰ったディスクを1枚渡す。今回の任務内容が入っているということだったのだが、ザッと目を通した範囲ではどうも目的が明確になっていない気がする。場合によってはもう一度本部局に問い合わせなくてはならないかもしれない。

「桂中尉は船内チェックです。」

「またやるんですか？」

「またやるんです。あなた方が宇宙空間に出るのが初めてだっていうから、こうして丁寧に1つ1つやってあげているんですが。」

「はい。はい。」

どうも何か一言言ってからじゃないと動こうとしないのは *Mya* の悪い癖だ。

私はこの間に今まで決めかねていたMR-7星系までのルートを決めるつもりでいた。途中まではMR-4星系行きの航路を使うからいいとして、私の考えではそこから大きく分けて2つのルートがあって、それはどちらを取るにしても危険だった。

1つは現在既に開通しているSR-4星系までの航路を利用するルート。これだと少なくともSR-4星

系までの安全は確保されるが、その先はかなり大きい小惑星帯がある。もう1つは最短距離を取って真っ直ぐ MR-7 星系に向かうルート。こっちの方が将来新航路を開く時に実用的だと言える。しかし、前人未到の空間と言う意味ではかなり危険と言えるだろう。いつもの私なら、迷うまでもなく後者を選んでるのだが…。

「船長、本船は現在 NV-6 星へ向かっています。このままこの進路を取り続けると目的地からかなり離れることになってしまいますが。」

「なんで…。」

NV-6 星なんてどっちのルートを取ったにしてもまるで方向違いの方にある星じゃないか。私は素早くキーボードを叩き、DCMに数字を次々と呼び出す。出てきた数字を目で追いながら手はもう次の数字を叩いている。

「あった！左舷の噴射ノズルの出力が落ちている。これで船体のバランスが崩れたんだ。」

つまりは船体のバランスを安定させる為に付いている3つの噴射ノズルの内、左舷に付いている1つが壊れてしまった為、ステーション離脱時の進路決定に狂いが生じたんだろう。これくらいのことであれば、原因さえはつきりすればなんということはない。宇宙においてはよくあることで片付けられる類のものだ。

「ということもあるので、船のチェックは念入りにやる必要があるんです。」

3人ともさすがに驚いたと見えて、少し青い顔をしている。これで少しは真面目にやるようになってくれると私としては非常に助かるのだが…。

「では、さっそくこれを誰かに対処して貰いましょうか。」

「えーっ！」

途端にうるさくなった。やはりこの3人に普通を期待するのは間違っているのかもしれない。

「これは基本中の基本ですから。そうですね、桂中尉、やってみてください。分からない所は私が教えますから。」

「全部分かりません。」

「じゃあ、このまま遭難しますか？3級を取っているんですから、当然知っていなければならない項目だと思いますが。」

「分かりました。やりますよ。やればいいんでしょ。」

渋々というか、開き直ったというか、とりあえず Mya は自分の席に就いた。しかし、そのままDCMを睨み付けて動かない。

状況としては、NV-6 星に進路を向けてしまっているアルトロンを正常な2つの噴射ノズルと進路変更用のバーニアを使って、いかに安定を保ちつつ進路だけMR-7星系に変えるかというものである。こんなことは日常茶飯事と言ってもよく、普通はこんなにいちいち大騒ぎなどしないものなんだけどね。

この先、この3人がまた宇宙に出るとなれば、否応なしに通るものだと言ってもいい。ここで対処できなければ、この先宇宙には出すことはできない。

「Mya、右が弱い。」

「どれどれ、あー、シバちゃん、そっち見てて。」

いい加減動かない Mya を見て柴野さんが手を出し始める。それをきっかけによろやく覚悟を決めたのか、Mya もレバーを操作しだした。

「*Mya*、今度は上下の出力が弱いよ。」

「あっこちゃん、そのスイッチ、それぞれ。」

「えーっ、どれよ。」

「早く、早く。」

遂に明子ちゃんまで手を出し始めて、目茶苦茶ではあるが一応スムーズに進路変更をやっているようだった。ま、最初だったらこんなものだろう。これだったら私が出すまでもなさそうだった。

「*Mya*、少し傾いているわよ。」

「あ、はい、はい。」

「あー！*Mya*、それ…。」

「えっ…？」

明子ちゃんの叫び声とともに妙な沈黙が流れる。その言葉のすぐ後ろを追いかけるように、ガガガガガ…という聞いたこともない振動が船内を駆け抜ける。

「何をやったんですか？」

「*Mya*がこのスイッチを押しちゃったんです。」

そう言いながら明子ちゃんが指差してみせたのは簡易ワープ装置の始動スイッチ。簡易ワープ装置とは、通常のワープ航法に比べて動作範囲が格段に狭い分、エネルギー損失もその分だけ少なくて済む。しかも、恒星の重力圏内でも使用できるという点でかなり便利なのだが。その反面、コントロールは非常に難しく、使い方を誤るとすぐ暴走をするという欠陥がある。

「そのスイッチには誤動作防止のカバーが付いていたと思いますが。」

「初めからありませんでした。」

簡易ワープ装置は研修所の講義なんかにはまだ出てこない部分だから、*Mya*が知らなかったからといって攻める訳にはいかない。むしろ責任は私にあるだろう。

「解除は？」

「できません！」

必死にコンソールを叩いている明子ちゃんが振り向きもせずに答える。

目的地だ…。進路変更中に始動スイッチが押されたせいで、アルトロンが目的地の座標を設定できなかったんだ。

もはや運を天に任すしかなかった。船体のバランスを崩していた時だからどうなるかは想像もつかないが、他のシステムがまだ全部正常に動いていることで少しは希望が持てる。

「3人とも早く自分の身体をシートに固定するように。」

全員が自分のシートについての途端、目茶苦茶な行き先のないワープが始まった。アルトロンがどこへ向かっているのか、それはワープ装置が停止した後でなければ誰にも分からない。

## 第五章「100%のトラブル」

H6. 25. APR

## 第六章 「MR-7 星系」

「ピーッ、貴船の所属と目的を教えなさい。こちらはキャットテイル-セブン所属ナイトウォーカー。」

ボーッとした頭の中で、さっきから同じ台詞を繰り返すスピーカーの音が響いている。どうやらどこかに不時着したらしい。ワープの後遺症か何かか、視力が元に戻らず何も見えない。

さすがにあの目茶苦茶なワープのせいで気を失ってしまったらしい。身体の半分以上を機械化してある私でさえこうだったんだから他の3人がどうなっているかなんかまったく分からない。

「ピーッ、貴船の所属と目的を教えなさい。こちらはキャットテイル-セブン所属ナイトウォーカー。」

ん…、起きなければ…。身体を無理矢理起こすと、まだ少し頭がフラフラしている。とにかく相手の船に連絡を取るのが先だ。

「ピーッ、貴船の所属と目的を教えなさい。こちらはキャットテイル-セブン所属ナイトウォーカー。」

「はい、こちらは太陽系第3惑星所属アルトロン。本船は推進装置の故障によりここへ不時着したものです。貴船の協力と救助を要請します。」

えっ…、柴野さんの声だ。目が見えないのでよく分からないが、どうやら彼女は無事だったようだな。

「了解。ただ今より本船はアルトロンの救助作業に移る。」

私は安心感と疲れがどっと押し寄せてくるのを感じていた。とりあえず助かった…。

「ねえ、ここどこだと思う？」

「いま計算してみるからちょっと待って。ところで *Mya* は？」

「知らない。さっき動力室へ行った時は一緒にいたけど。」

ははは…、3人とも無事だ。良かった…。

起こしかけていた身体に力を入れると、なんとかシートの前に立つ事ができた。しかし、目の方はまだぼんやりとしか見えない。

「2人とも無事なんですか？」

「くま先輩、起きて大丈夫ですか？」

「それはこっちの台詞です。本当なら私が先にやらなければならないことをすべてやって貰ってしまった。」

「そんなことはないです。ただ、あたし達の方がくまさんより少し特別なだけです。」

えっ…？一瞬、どうしてだか分からないが、ぼんやりとしか見えない柴野さんの笑顔に恐怖を感じる。

「くま先輩、本船の正確な位置が分かりました。えーっと、ここはMR-7星系第3惑星です。」

「あら、じゃあ一応目的地には着いていたんですね。」

まさかとは思っていたけど、本当にMR-7星系に着いてしまうとは…。ここまでくると偶然とは思えないし、あの噂も信じなければならぬかもしれない。

もし、この星に着いたのが偶然でないとしたら、それは彼女達3人のお陰ということになるのだ。まさに彼女達3人によって大事になった事態は、彼女達3人によって救われたことになる。

「湯浅中尉、この惑星の大気を至急調べて下さい。」

「はい。」

明子ちゃんが再びパネルに向かった時、*Mya* の声が響く。

「その必要はないと思う。この惑星は地球型みたいだから。ちなみにこの惑星の名前はキャティと言うらしいです。」

「桂中尉、どうしてそんなことが分かるんですか？」

「だって聞いたんだもん。」

「誰に？」

「この惑星の人にです。結構この船の周りに集まって来てますよ。あたし、その人達と仲良くなっちゃった。」

なっちゃったって…、まったくなんて無茶をやるんだ。もし、大気に酸素が含まれていなかったらどうするつもりだったんだ。

しかし、余りにも呆気らかんとしている *Mya* を見ていて、だんだん怒る気もなくなってくる。まあ、いいさ、とりあえず生きているという事だけでも今の私達にはできすぎなのだから。

「でも、それならいろいろとこの惑星について聞けるから便利ねえ。」

「まあ…、そうかもしれない。」

おそらく例の怪電波についても聞くことができるんだろうけど。それにしても、局長には救助作業になるかもしれないなんて言われていたのに、結局こっちが救助される羽目になるとは…。

「ピーッ、これより貴船の救助作業を開始します。」

「了解…。くまさん、なんて答えますか？」

柴野さんがちょっと首を傾げてこっちを見る。

「*Mya* が外に出れたのなら問題はないでしょう。こっちから全員出ていくと伝えて下さい。」

「はい。こちらアルトロン。本船の乗組員は4名、これより全員退船致します。」

さすがに1級通信士の資格を持っているだけあって、柴野さんの応答は大したものだった。それに、明子ちゃんもアルトロンの操作をすっかり自分のものにしたみたいで、見ていて不安がなくなった。*Mya* についても、多少の不安は残るものの、あの情報の早さは目をみはるものがあるし。ひよっとすると、私はこの3人の見方を変えなくてはいけないのかもしれない。

「じゃあ、出ましょう。この惑星の人達が待ちくたびれるといけませんから。」

「エアロック、オープンします。」

明子ちゃんがエアロックを開いてくれる。

「わあ…。」

ようやく視力が戻ってきた目にこの惑星の風景が飛び込んでくる。と同時に余りの美しさに言葉も出ない。明子ちゃんも柴野さんも同じらしく、ただ茫然とこの景色を眺めている。

「あたし、先に行ってますね。」

既にこの風景を見ている *Mya* だけが、さも当然といった感じで、さほど驚きもせずに駆け出していく。

「昔の地球ならば、まさに秋の紅葉といったところだね。この惑星の生態系がどうなっているのかは調査してみなくては分からないけれど、たぶん本当に地球にそっくりなんだと思う。」

私は感動していた。まさかこの目でこんな美しいものが見れるとは思ってもいなかった。他の2人にしあって、紅葉を知識でしか知らない世代だからなおさらのものがあるに違いない。

「さあ、行こうか。」

2人を促したものの、私は少し不安だった。いったいこの惑星の住民に会ってなんて言えばいいんだろう？よく考えてみれば今回の予定にはここまで入っていなかったはずなのだ。

私の任務はこの星までの航路を確保する事で、そこから先の事態は上の判断を仰ぐつもりだったのだ。

「くまさん、考えていたって仕方ないんだから、まず会ってみなくちゃ。」

「え…？」

「ねっ！」

柴野さんはそんな私の心の中が分かるのか、明るくニッコリと微笑む

仕方がない、覚悟を決めるか。しかし、この件を知ったら、あの委員長はいったいなんて言うんだろう？

小高い丘を登り切ると眼下に大勢の人達が集まって来ているのが見えた。その中を *Mya* が手を振りながら飛び込んでいく。

時には彼女のやり方を真似してみるのも悪くないかもしれない。なんか、そんな気持ちが心の中に広がってくるのが分かる。

「うん。」

私は大きく深呼吸をすると、一気に駆け降りていった。

## 第六章「MR-7 星系」

H6. 25. APR

## 第七章 「最果ての地から…」

「という訳でこれが今回の報告書です。」

「うん、ご苦労だったな。」

ここは議会本部の委員長室。連邦政治局のお偉方相手に報告を済ませたばかりの指田少佐と連邦委員長がいた。

「それで、彼女達は？」

「それが、よっぽどキャティが気に入ったのか、帰ってくるなりまたすぐキャティに行きました。」

「そうか…。」

委員長は飲みかけの紅茶のカップを手の中に置いたまま、何かを思い出してクスクス笑っている。

「ま、今回のこの成功の半分は彼女達のものだからな。少しは大目に見るさ。」

「そうですね。」

指田少佐も素直に頷いた。

しかし、どちらかと言うと、このコンタクトは彼女達がいなかったら成功しなかったと言ってもよかった。彼らキャティの住人から色々なことを聞き出したのは、結局のところ全部彼女達だったのだから。指田少佐なんかアルトロンの修理ぐらいしかすることがなかったのである。

「それにしても驚きましたよ。3日戦争以前に外宇宙に飛び出すだけの装置を積んだ船があったなんて。」

「まったくだ。これについてはもう一度過去の記録を調べ直さねばならないとは思っているよ。」キャティの住人…、いや彼らとて元々は地球人だったという事実が判明した時、余りの内容に指田少佐は3回も相手に聞き直してしまったほどだった。

3日戦争より遙か昔、彼らの先祖が船の電源装置の故障から辿り着いた惑星、それがMR-7星系第3惑星キャティだった。例の救助信号はこの時発信された物で、なんと100年以上も経ってから地球で受信されたのではないかということだった。

その間、地球はその姿をすっかり変えてしまい、彼らもまたいつ来るか分からない救助船を待ちながらキャティの大地にしっかりと根を降ろしていた。既に今いる住人は地球を知らない世代であり、まさか自分達以外の人間に会えるとは思っていなかったらしい。

あの3人がキャティの人達から聞き出した内容はそのまま報告書として永世議会に提出され、それにより連邦政治局としては正式に外交を行なうという異例の結果が出た。

「ところで、どうしても委員長に訊きたいことがあるんですが…。」

「あの3人のことか？」

「ええ、私が最初彼女達の階級が中尉だと聞いた時、委員長は彼女達が資格を持っているからだと言いましたよね。それはそれで確かにそうなんですが、私の推測が正しければ彼女達の階級は私なんかより上なんではないかと思うのですが。」

「やはり気付いたか…。」

「ということはやっぱり…。」

委員長は少し肩をすくめてみせると、手の中で弄んでいたカップの中身を一気に飲み干した。

「彼女達の超能力はこれでもトップシークレットでね。君には悪いことをしたが、今回のことは一種の実験だったんだ。」

「じゃあ、私は彼女達にすっかり騙されたという訳か。」

「いいや、彼女達には今回のことを含めてそんな能力があることも知らせてはいないんだ。」

「確かに…、あれは本人たちに自覚がないから許せるんであって、もしわざとやっていたんなら怒りますよ。」

「できることならこのまま一生気付かないで欲しいという気もする。特に柴野中尉のテレパシー能力は今後諸刃の剣になりうるし、下手をするとこの社会を根底から覆すことになりかねない。」

「同感です。しかし、彼女達なら、きっと私達が気付きもしなかった方法で乗り越えて行くような気がするんです。」

指田少佐の言葉に委員長は素直に頷いた。

今後もキャティの様な人類の生存可能な惑星が見つかるかもしれない。ひょっとしたらそこには地球人とはまったく生態系の異なる住民がいるかもしれない。そんな時、彼女達の様な人間が必要となるのだろう。

「ピッ、委員長、この生物をなんとかして下さい。私には扱いかねます。」

「どうした、ウインダム。」

「ピッ、これ以上つきまとわれるとシステムに影響が出かねません。」

ウインダムが額のインジケーターを激しく点滅させながらやって来る。そして、その周りをウインダムにまわりつくように毛玉みたいな物が転がっている。その毛玉が転がって、指田少佐の足許まで来た途端、いきなり「みゃう」と鳴いたかと思うと指田少佐の背中を駆け登る。

「うわっ、いたたた…。」

それをみていたウインダムは今のうちにとばかりに隣の部屋に逃げ帰る。

「猫じゃないですか、どうしたんですか？」

「ああ、そいつはさっきキャティから着いたばかりなんだが、どうやら彼女達からのプレゼントらしい。」

ククス笑う委員長に対し、ようやくその毛玉の正体を自分の肩から引き剥がした指田少佐はしかめっ面で腕の中に抱く。

「地球で育つんですか？」

指田少佐の質問ももっとも言える。今や地球上には人間以外の動物はほとんど残っていないのだから。

「大丈夫だろう。元々地球にはたくさんいたんだ。彼女達のレポートによれば、あの惑星には猫が多いらしいな。そうそう、柴野中尉が上手いことを書いていたよ。あの惑星は、天高く猫眠る星なんだそうだ。」

「天高く猫眠る星か…。」

指田少佐はキャティの風景を思い出していた。あの初めて見た時のキャティの風景は2度と忘れないだろう。猫はいつのまにかに指田少佐の腕の中で気持ち良さそうに眠ってしまっていた。

MR-7 星系第3 惑星キャティ。地球より約7億6千万光年離れた惑星。現在の人口2936人プラス猫、ネコ、ねこ。それに好奇心旺盛な女の子3名。

3日戦争から遡ること34年、人類の希望を乗せて打ち上げられた大型船キャティには、国籍もバラバラな男女が500人ずつ、それに猫、犬等のペットが各オス・メス1匹ずつが乗り込み、10年間の宇宙生活に旅立った。これは、来たるべき宇宙時代に備え、地上生活との違いを調査することを目

的に某大国が計画した物だった。

地球を出発して2年目のこと、電源装置の故障により偶然辿り着いた惑星、それがMR-7星系第3惑星だった。人々は余りにも地球と環境が似ているこの惑星に降り立ち、非常電源を使って最後の救難信号を出し続け、地球からの救助が来るということ信じながら新しい生活を築いていった。人々は新しく生活していくこの惑星に、自分たちが乗ってきた船と同じ名前を付け、キャティと呼んだ。そして、100年以上も経った現在、その名が示す通り猫の多い惑星になってしまった。それも、初めはたったひとつがいの猫だったというのだから驚きだ。

やがて人々は故郷の事を忘れた。それは、いくらキャティが地球型の惑星だったといっても、1000人からの人間が生活していくには幾多の問題があった事と、惑星の住人が1000人を越えてきたことからだった。つまり、2世と呼ばれる世代が誕生しつつあったのだ。

それから100年余り、地球は大きな変貌を遂げ、そしてキャティも変わった。キャティの人々は地球を忘れ、地球人はキャティなんて惑星の存在すら知らなかった。

そう、遙か彼方の空からアルトロンが落ちてくるまでは…。

「ところで、もう1つ訊いてもいいですか？」

「なんだ？」

「いえ、委員長が彼女達に握られている弱味とは何なのかと思ったもので。」

指田少佐は悪戯っぽくそう言うと、久々に心の底から笑い続けた。

## 第七章 「最果ての地から…」

# 『最果ての道を超えて』 一天高く猫眠る星シリーズ1ー

H6. 25. APR